

press release



磯江毅《新聞紙の上の裸婦》(部分) 1993-94年

まもなく開幕！！

開会式情報、展覧会構成など情報を追加しました。

会 期:平成27(2015)年

3月25日(水)～5月24日(日)

会期中無休

開館時間:9:00～17:00

※金曜日は20:00まで ※入館は閉館30分前まで

料 金:一般 1,200円 (1000円)

高・大学生 900円 (700円)

小・中学生 600円 (400円)

※()内は前売・20名以上の団体料金



- ・JR広島駅より約1km ・広島城より約400m
- ・市内電車(「八丁堀」で乗り換え)白島線で「縮景園前」下車約20m
- ・ひろしまめいぶる〜ぶバス「県立美術館前」下車

名勝「縮景園」とともに歩む アートの社
広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22 TEL(082)221-6246
http://www.hpam.jp/ FAX(082)223-1444

広島ホームテレビ開局45周年記念事業

【開会式について】

次の通り、「スペイン・リアリズム絵画の異才 磯江毅 —広島への遺言—展」の
開会式を行います。

報道各位におかれましては、取材・広報にご協力いただきますようお願いいたします。

※現在の予定であり、当日変更となる可能性があります。

日時／平成27年3月25日(水)午前9時30分～

場所／広島県立美術館 3階企画展示室入口 ロビー

1 開会の辞

2 主催者紹介・挨拶

- ・広島県立美術館 館長 越智 裕二郎 (紹介・挨拶)
- ・広島ホームテレビ 代表取締役社長 大辻 茂 (紹介)
- ・中国新聞社 代表取締役社長 岡谷 義則 (紹介)

3 来賓紹介

- ・磯江毅氏ご令室 磯江 幸江 様 (紹介)

4 協賛者紹介

- ・広島県信用組合 会長 吉田 貞之 様 (紹介)

5 講演会講師紹介

- ・昭和女子大学人間文化学部教授 木下 亮 様 (紹介)

6 テープカット

- ・磯江毅氏ご令室 磯江 幸江 様
- ・広島県立美術館 館長 越智 裕二郎
- ・広島ホームテレビ 代表取締役社長 大辻 茂
- ・中国新聞社 代表取締役社長 岡谷 義則

7 閉会の辞

司会／広島ホームテレビアナウンサー 渡辺美佳

(内 覧)

【展覧会概要】

その圧倒的な細密描写を、深い精神性と避けがたい死への洞察によって独自の画風へと昇華させた磯江毅(1954～2007)。絵画修業のため19歳で単身スペインに渡った磯江は、やがてスペイン美術界で最も注目される一人となりました。2005年には広島市立大学教授に就任し広島美術界に足跡を残し



磯江毅 《新聞紙の上の裸婦》1993-94年

つつも53歳の若さで他界しました。独自の死生感と彼しか成し得ない緻密な描写は、凝縮された時間を感じさせ、観る人を深い思索へと誘います。磯江の初期から絶作まで、代表作約100点を通して、彼の芸術の軌跡をたどるとともに、その稀有な画業をご紹介します。

磯江毅 (いそえつよし、1954—2007) 略歴

- 1973 大阪市立工芸高等学校図案科卒業
- 1974 スペインに渡り以後マドリードに定住
- 1974-76 デッサン研究所「ペーニャ」にてスペインアカデミズムのデッサン、美術協会で人体デッサンを学ぶ
- 1975-77 プラド美術館にて15世紀フランドル派絵画の模写を行い技法の研究に努める
- 1981 ハルセロナ伯爵夫人賞展(当時スペイン最大のコンクール)にて名誉賞を受賞
- 1983-87 この頃からマドリードのリアリズムグループ展に精力的に参加するようになる
- 1989 「存在:14人のリアリズム巨匠展」に出品
- 1991 「スペイン美術は今—マドリードリアリズムの輝き」(高島屋)でスペインの画家として紹介される
- 1992-95 マドリードインターナショナルアートフェア「ARCO」に出品。注目を集める
- 1992 「美しすぎる嘘、現代リアリズム展」にスペインの作家として参加('97も)
- 1994 「リアリズム スペイン現代美術」画集刊行記念展出品
- 1996 「両洋の眼」展出品('01、'03も)
- 1998年以降 東京芸術大学美術学部非常勤講師
- 2000年以降 広島市立大学美術学部非常勤講師(2005年以降教授)
- 2003 「存在の美学」展に参加('05、'07も)
- 2007 9月27日 逝去



【**展覧会構成と内容**】 本展は大きく分けて3つのパートで構成します。

第一章 リアリズム(写実)との出会い

1974年、19歳の磯江はヨーロッパで本物の西洋美術に触れたいと、プラド美術館のあるスペインへ渡ります。プラド美術館でドイツのアルブレヒト・デューラー、15世紀フランドル派の画家たちの緻密で静謐ながら「内なる力を秘めたリアリティー」に感銘を受けたことが、後の絵画表現の原点になったと磯江は語っています。

磯江はほぼ独学で「マンチャ」と呼ばれるスペイン伝統のデッサン技術を究める一方で、プラド美術館で模写に取り組んで北方ルネサンス絵画の高度な技法と精神性を自分のものとしします。そして「内なる力を秘めたリアリティー」を現代に再現しようと絵画制作に取り組めます。

この章では磯江がスペインに留学する直前の1974年、19歳で描いた素描から、プラド美術館で取り組んだ古典名画の模写や画壇で注目されるきっかけとなった「シーツの上の裸婦」、スペインの古典絵画を研究したボデゴン(厨房画)まで、磯江がスペインでの評価を確立していった約20年間の制作の歩みをご紹介します。



ローヒル・ヴァン・デル・ウェイデン
《聖母子》模写

第二章 ものの命を描く

磯江は、スペインで画家として高く評価されるようになった1990年代、絵画の「内なる力」を表現することに全力を傾けます。磯江は、表現するのは自分ではなく、対象物自体であり、その物が表現している姿から重要なエレメントを読み取り、抽出することこそ、「内なる力」を見つけ出すことだと考えます。そして、角膜に受動的に映る映像を根気よく写す行為ではなく、空間と物の存在のなかから「摂理」を見出すことが自分の仕事と考えるようになります。

磯江はこの「摂理」を見極めるため、長い時間、対象物と向き合います。たとえば、描いているうちに腐ってしまう葡萄の粒を取り除いては、新しい葡萄を買ってきてそっくりな粒を選んで接着し、また描き続けたと言われている。

それほど磯江がこだわって描き出そうとしたものは、有機物、無機物を問わず、対象の持つ「内なる力」即ち“生命”そのものだったのではないのでしょうか。磯江は対象物を徹底的に見てその「内包された生命」、いわば生の「摂理」を描き出そうとしていたと思わざるを得ないのです。この章では、ものの「摂理」を追求した苦闘の10年間の作品をご紹介します。



静物(パンと瓶のある静物)

第3章 滅びを描ききる

活動の拠点を日本にも設けた磯江は、2001年に《Vanitas(虚栄)と私》という作品を完成します。ヴァニタスとは虚栄と訳される通り、地位や名誉はうたかたであり、命には限りがあると説く西洋絵画の伝統的な主題ですが、磯江はそのテーマを自画像とともに描いたのです。

それまでの10年間、「内なる生命」とその摂理を描いてきた磯江は、対象物の命の有限を感じ、存在そのものも何時かは滅びるものであること強く意識していたのでしょう。いわば「滅び」の摂理をヴァニタスを通して描こうとしたのではないのでしょうか。

そんな矢先の2002年、磯江の体にガンが見つかります。しかし、磯江の制作活動は衰えを見せませんでした。万物が逃れることができない“死”という運命を自らの問題として描き続けたのです。2005年には広島市立大学教授に就任し、これまでの創作活動を通じて到達した絵画技術・哲学を若い芸術家たちに遺そうと、熱心に指導しました。

磯江の絶作となった《鯛》は、白い皿に食べ尽くされた鯛が乗っているだけのシンプルな構成ですが、その画面からは不思議と虚無感ではなく、静謐な穏やかさが感じられます。死もまた「摂理」と受容した磯江の悟りの境地がかいま見える作品です。

この章では、2001年から2007年まで、「内なる力」の滅び、死を自らの問題として描ききった磯江の世界を紹介します。



《バニータスⅡ —闘病—》
2006-2007年



《鯛》
2007年

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。

press release

【関連イベント】

講演会(広島県立美術館友の会共催)

日時:4月11日(土) 13:30~15:00 [受付開始/30分前]

演題:「磯江毅—スペイン・リアリズムを超えて—」

講師:木下 亮(昭和女子大学大学院生活機構研究科教授)

会場:地下講堂(定員/先着200名) ※聴講無料。事前申込不要。

木下 亮 (きのした あきら/昭和女子大学 大学院生活機構研究科 教授)

早稲田大学大学院修了後、スペイン美術史研究のために1981年からマドリード・コンブルテンセ大学博士課程に留学。この留学中に磯江氏との出会いがあり、家族ぐるみで終生の交流が続きました。今回の講演会では磯江氏の絵画の特徴を、彼が生きた同時代のスペイン美術の展開のなかで改めて考えてみます。

著作には、『磯江毅 写実考(1974-2007)』(共著、2009年)、『現代スペイン・リアリズムの巨匠 アントニオ・ロペス』(共著、2013年)、『アントニオ・ロペス 創造の軌跡』(訳、2013年)、『プラド美術館展』図録(2006年)などがあります。



ギャラリートーク

日時:毎週金曜日

11:00~(3月27日、4月3日、4月10日、4月17日、4月24日、5月1日、5月8日、5月15日、5月22日)

18:00~(3月27日、4月10日、4月24日、5月8日、5月22日)

場所:3階企画展示室

※当館学芸員が展覧会をご案内します。各回とも30分程度。

※要入館券。展示室入口にお集まりください。

ウェブレポーター大募集

受付日時:3月27日(金) 17:00~19:30

受付場所:3階ロビー

対象:ホームページ、ブログ、ツイッター、フェイスブックなどで、本展PRにご協力いただける一般の方。

※実施当日に限り、本展にご招待。

ロビーコンサート「秋友ともみフラメンコライブ」

日時:4月4日(土) 12:00~ [約40分]

出演:秋友ともみ(バイレ/踊り)、スペイン舞踏スタジオ「秋」-Aqui-メンバー(バイレ/踊り)、

梶原龍(ギター)

会場:地下講堂(定員/先着140名)※鑑賞無料。事前申込不要。



フラメンコライブの様子

press release

【テーマ曲】

磯江毅展では、スペイン人ジャズピアニスト ホアン・オルティス氏 (JUAN ORTIZ) によるテーマ曲をご用意しました。神戸のアトリエを訪問し、作曲の構想を進めたオリジナル曲です。(本展のCMなどで使用しています。)

会期中、本展特設会場グッズコーナーにてホアン・オルティス氏のCDを販売します。あわせて、お楽しみください。



ホアン・オルティス氏

スペイン・リアリズム
絵画の異才
磯江毅展
Isoe Tsuyoshi
— 広島への遺言 —

【開催概要】


展覧会名称

スペイン・リアリズム絵画の異才 磯江毅 — 広島への遺言 — 展

開催クレジット

主催 広島県立美術館、広島ホームテレビ、中国新聞社

後援 中国放送、広島テレビ、テレビ新広島、広島エフエム放送、FMちゅーピー76.6MHz、
エフエムふくやま、尾道エフエム放送、FMIはつかいち76.1MHz、FM東広島89.7

協賛  広島県信用組合

企画協力 彩鳳堂画廊

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22 TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail. keiko_yamamoto@nomurakougei.co.jp (山本宛)

担当 学芸課 角田 新、事業推進課 山本恵子